



外傷整形外科医が漢方について思うこと

整形外科担当部長 圓尾 明弘

私は整形外科の中でも、超急性期の救急病院で外傷を専門にする整形外科医です。骨盤骨折、多発外傷や開放骨折などの急を要する疾患を扱うことが多いのですが、漢方薬もよく使います。東洋医学の漢方薬といえば慢性疾患に効果があると思われがちですが、そうではありません。漢方の中でも今ある症状をスパッと改善するもの、根本的な体質を改善するものに分けられます。手術が好きな外科医 = 「いらち」ですので結果を早く求めることから前者を好みます。

たとえば、骨折すると局所は出血して、血腫となり熱を持って腫れます。そして全身的には、循環血症量が減るので脱水になり、貧血をきたすので全身倦怠感を自覚します。これを東洋医学的に読み変えると「局所の出血」「血が滞る「瘀血」」になるので血の巡りをよくする「駆瘀血剤」が必要になります。熱をもって腫れるので、熱をさまして水の巡りをよくする薬が必要になります。血管内脱水は補液ですが、それが慢性的に続くと組織内脱水になります。それを「陰虚」といって水を補う「滋陰剤」が必要になります。急な貧血には輸血ですが、慢性的に血が足りない「血虚」には血を補う「補血剤」が必要です。全身倦怠感、気が足りない「気虚」で、それには気を補う「補気剤」が必要です。このようにいくらでも漢方薬が活躍する場面はあります。

漢方の特徴はこのように患者さんの病態や体質に合わせた処方を選ぶことができることです。逆に患者さんの病態や体質を見極めてそれにあつた処方を選ばないと効果がありません。そこで、整形外科病棟では週に一回漢方廻診を行い、問題のある人をピックアップし、東洋医学的な診察をしてそれに従って処方を出しています。周術期は病態が刻一刻変化するので毎週処方が変わることもあり、我々も大変勉強になります。

外来ではリウマチ患者さんも多く診察しています。最先端の生物製剤も取り入れています。それでも出てくる不定愁訴には漢方薬が効果を示します。長い付き合いになるので徐々に体質改善させてあげることができます。漢方だ



(広畑臨床漢方研究会の風景)

けでリウマチが治ることはないのですが、うまく併用することで病態が落ち着いてきます。

また、院内の漢方好きが集まって症例検討をしたり、講義をしたり、診察の方法の実践を行ったりする「広畑臨床漢方研究会」を2002年から定期的に行なっております。そこで症例を出して、みんなで病態を考えて鑑別処方を挙げていきます。実はこのステップが非常に大事で、病態を見極める力と、それにあつた鑑別処方を挙げることで効果がなかった時の修正ができます。ツムラさんにもらう効能書きを見て処方をしてもなかなか効果がありません。

最先端の機器を取り入れて行う手術も外科医にとっては武器になりますが、温故知新の東洋医学という武器を持っていると診療にも幅が出ます。地域の先生方も参加していただいております。当院ホームページでもお知らせをしておりますので、興味がある方は是非一度「広畑臨床漢方研究会」を覗いてみてください。



